

『派遣勇者』 - 七色不思議

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

0

手足を鎖に繋がれて魔王城に監禁されているお姫様は、「助けて勇者様」と心の中で奇跡が起こることを祈る。

人間界の王国をもうすぐ陥落させることができそうだ、という報告を部下から受けた魔王は、王座に腰を下ろして血のように真っ赤な赤ワインを口にし、残虐そうな笑みを浮かべて愉悦に浸る。

城の周りを魔王軍に包囲されて逃げ場を失った小国の王様は心の中の絶望感と戦いながら、全ての希望を異世界から召喚する勇者に託す。

そして勇者は――

1

全体が石造りの壁で覆われた地下の大部屋。部屋中に並べられた蝋燭の灯りによって十分な光源が確保されていた。青色のローブを着た二十人もの魔術師が収まっている。そのうちの十三人が円陣を作って部屋の中央にある魔法陣を取り囲み、舌を噛みそうになるほどの複雑な呪文を唱えていた。

その部屋の隅で、やせ型の五十代ぐらいの大臣と小太りで小柄な白髪頭の王様が言い争っている。

「本当にこれでいいんですか、王様!？」

「構わん。我が軍も壊滅し、魔王軍に包囲された城が落とされるのも時間の問題。この絶望的な状況から我々、人間が逆転するためには、禁忌を犯して異世界から勇者を召喚するしかない。それもとびきりの伝説級、即戦力となるハケン(八ケン)の勇者を」

勇者とは古今東西、聖なる巫女や神官の呼び掛けに応じて異世界に召喚され、世界を滅亡の危機から救う存在である。異世界の間人達は勇者を救世主として崇め、時に権力者達は魔王を倒すための駒として利用していた。そうして世界を救った後に勇者は元の世界へと帰還する。

勇者という存在は異世界の間人達にとっての希望の象徴であった。

「ワシは今まで築き上げてきた全てをなげうってでも、魔王にさらわれた娘を助け、この国を救う覚悟がある」

「しかし王様――」

「勇者を召喚する準備が整いました。もうすぐ勇者がこの世界に召喚されます」

勇者の召喚に参加していない魔術師の一人が王様に報告する。

そうか、と王様は深く息を吐き出し、魔術師達が取り囲む魔法陣の方を見る。

魔術師達が呪文の最後の一節を唱え終わると同時に、魔法陣は眩いばかりの青色の光を発して部屋中をその光で包み込む。

あまりの光の強さに部屋にいた者は皆、目を閉じて顔を魔法陣から背けた。

魔法陣から出た光はすぐに消えて、部屋の中央から人の声が聞こえる。

「ここはどこでしょう？」

声の出所が気になった王様はそっと目を開けて魔法陣の中を見た。

魔法陣の中心には長身の男が立っていた。

男の年齢は二十代前半ぐらいで、針金細工のように長い手足が特徴的であった。しかし、その場にいた者は全員、異世界から召喚された勇者の服装に目を奪われる。

男は黒のリクルートスーツを着ており、髪型は清潔感のある黒の七三分け、目には黒ぶち眼鏡、真面目そうな印象を受ける顔立ち、胸には青のネクタイ、靴は黒のローファー、手にはビジネスバッグを提げている。

その姿はまさしく現代の企業戦士、サラリーマンの正装であった。

しかし、サラリーマンという文化を知らないこの世界の住民達は、勇者の格好の奇抜さに目を見開いて驚いた。

異世界に召喚されたことを理解したサラリーマン風の勇者は、周りを見渡して一番偉そうな人を探す。

「なるほど、仕事というわけですか」

勇者は魔法陣の中から出て、王様の元へとゆったりとしたペースで歩み寄る。

「まずは自己紹介を。私、こういう者です」

勇者は流れるような手つきで胸ポケットに入った名刺入れの中から名刺を取り出し、未だにこの状況を把握し切れていない王様に名刺を手渡す。

「どうも初めまして。異世界から召喚されました、派遣勇者をしております。田中霸王と申します。以後お見知りおきを」

名刺は日本語で書かれていた。だが、名刺に使われた紙に異国の言葉を読めるようにする魔法が掛かっていたため、王様は名刺に書かれた文章を理解することができない。

「勇者の名はタナカと言うのか。では、早速だが勇者タナカよ。この世界を救って欲しい」

王様はあくまで上から目線で勇者に頼む。

得体の知れない存在感を放つ勇者を前にしても、王様が威風堂々とした態度を崩さなかったのは、これまで培ってきた国王としての経験がなせる業であった。

大臣は完全に勇者の存在に畏縮してしまって、王様の傍に控えたまま勇者との交渉の行く末を静かに見守る。

「世界を救うのが今回の仕事ですか——しかし、その前にやっておくべきことがあるでしょ、王様」

「何だ？ 武器の手配か、それとも地図の用意か？」

「違います。最初は自己紹介です。お互いにどんな人物か知らないことには交渉が始まらない」

「確かに、近頃は装備だけをやたらと整え、勇者になった理由が『魔王に殺された幼馴染みの仇を取るため』と、言うことと実力が伴わない、意識が高いだけの勇者で溢れておる。相手を知ることが大切かもしれんな」

「では、まずはこれをお受け取りください」

勇者はビジネスバッグの中から履歴書を取り出して王様に渡す。

何だ、と王様はとりあえず勇者から受け取った履歴書に目を通す。

そこにはこれまで勇者の簡単な学歴が記されており、最終学歴が大学中退で、その一年後に勇者派遣会社を設立、その後は数多くの異世界を救った実績が記載してある。

「大学を中退したのは、在学中に異世界に長く滞在し過ぎたため、出席日数が足りずに留年したからです。勇者として世界を救う仕事自体は高校生の頃からやっており、いつまで経っても私は異世界から勇者として召喚される体質らしく、大学中退から一年後に勇者派遣会社を設立した所存です」

資格の欄には、簿記二級と戦士と魔法使いと僧侶——と勇者のなることができる戦闘職がびっしりと記されていた。

「この履歴書は資格を書く欄が少なかったので、私になれる職業を全て記載することができませんでしたが、世界を救う旅をする過程でダマ神殿にて転職を繰り返し、様々な職種を極めて経験を積んできたため、大抵の戦闘職には転職が可能です。勿論、簿記二級を持っているので財務貸付貸借対照表の作成もできます」

ほほう、と王様は唸り声を上げて履歴書を読み込む。

「得意魔法は己の全魔力を溜めて放つマガンテ——ではなくてエネルギー砲です。一撃で魔王どころかこの大陸をこの世から消し去る威力があります。また、最近読んでいる本は推理小説です。これで私の職歴に関する話は以上なので、他に何か質問があるならどうぞ」

大学や簿記二級といった単語が何なのか王様には分からなかった。だが、この勇者

が今まで幾度となく世界を破滅の危機から救ってきた救世主だということは、この履歴書を読んで理解できた。

「これは素晴らしい。では、早くワシ達を魔王軍の侵略から救ってくれ」

「私の能力に不満がないようなら、依頼の詳細な内容は後で詰めましょうか。では、先にこちらの契約書にサインをお願いします」

契約書はしっかりと最後までお読みください、と勇者は鞆の中からコピー用紙の契約書と黒のボールペンを取り出して王様に渡す。

契約書にはプリンターで印刷された二文と書目欄があるだけ。

『一、仕事のやり方は勇者に任せる』

『二、依頼の成功報酬としてあなたの持つ世界の半分をいただきます』

「な、なんだ、これは！？ 世界を救う対価が世界の半分だと！」

契約書を読んだ王様は紙を持つ手に力を込めて声を荒らげる。

もしもこの城を取り囲む魔王軍を撃退し、魔王に囚われた娘を取り返すことができるのであれば、この自分の命を捧げてでも良いと思っていた王様であった。だが、先祖代々治めてきた自分の命よりも大切な湖の国の半分を勇者に差し出すという条件には、胸に秘めていた彼の決意が揺らいだ。

「これがこの世界を救うにあたって必要な報酬です。世界の半分というのはあなたが所有している領土だけではなく、国民や財産も含みますので注意してください。依頼を達成した後は、私の方で判断したあなたの持つ世界の半分を別世界に転送しますのでご了承ください」

「別世界に転送って、ワシの国をか！？」

はい、と勇者は涼しげな顔で頷く。

「土地や人ごと、転送魔法を使っていただいています。そこに住んでいる者達の身の安全は保障するのでご安心を。別世界に土地を移動させた後には、跡地に大きな穴が開くことになるでしょうが、二割報酬追加することでアフターサービスを利用して穴を更地にすることができます。どうしますか？」

「どうするかだと……なぜ、我々、人間の世界を悪の権化である魔族から救うために存在するはずの勇者が、世界の半分などと大それたことを要求する？」

「お客様に納得していただくために説明しますと、私は勇者から神様に転職して、自分にとって住みやすい世界を造りたいのです。過去に私を異世界に導いた神様に話を聞いたところ、地球ほどの大きさの惑星を持ち、そこに神様を信仰する知的生命体が存在すれば、その星の神様になれるそうなのですが、あいにく私には星を一から創造する力はございません。そこでこうして勇者としての仕事をこなし、報酬としてあなた方が待つ世界の半分をいただいて自分の星を造っているのです」

予想外のスケールの大きさに王様の手が震える。

まるで悪い夢を見ているような気分で、王様は勇者の話に現実味を感じる事ができない。

「あっ、星の創り方とかは企業秘密ですので、具体的な方法はお答えできませんよ」

「勇者よ、そちの話は全て真実か？」

「本当ですよ。報酬が世界の半分と聞いてお悩みのようですね、王様。でも、世界を半分差し出すことで、神様でも起こせないような奇跡を起こせるなら、安い対価だと思いませんか？ 前の依頼主は気前よく世界の半分を私にくれましたよ」

「貴様は人の皮を被った悪魔か！」

王様は手に持っていた契約書を握り潰して怒鳴り散らす。

「悪魔ではありませんよ。悪魔は契約者の魂を取ると言いますが、私は王様の命なんてこれっぽっちも興味がありません。ついでに言えば、世界を救う報酬が好きな女性と永遠に結ばれると言われても、それでは対価が釣り合いません。そもそも私、結婚していて妻と子を養わなきゃいけない身なので、王様の娘とかを交渉の材料にされても困りますよ」

娘という言葉聞いて、魔王に囚われた自分の娘のことを思い出した王様は興奮状態から我に返る。

湖の国に住まう国民のことも大事だが、それと同じぐらい自分の娘のことは王様に

とって大事な存在だった。

この湖の国を継ぐはずだった息子は十五歳の時に初めての戦で戦死。その後を追うようにして妻は流行り病で亡くなり、唯一残った一人娘を男手ひとつで育て上げた。今年で十六歳ともなればもう嫁入りの時期だろう。ここまで美しく清らかに育ててくれた娘のためにも、娘に相応しい婿を見つけてきて孫の顔を見るはずだった。

それをどうしたものか。王様自慢の娘は魔王にさらわれ、王家の血を継ぐ娘を人質にされてしまったのは魔王軍の進撃に対して強い反撃に打って出ることでもできない。不利な戦局が続いてもうすぐ湖の国は魔族の手によって滅びようとしている。

王様の頭の中に走馬灯が駆け抜け、勇者に頼ることしかできない自分の不甲斐なさに涙が込み上げてくる。

「頼む……ハケンの勇者よ。世界の半分を差し出そう。だから、この国の未来と魔王に囚われた私の娘を救ってくれ」

王様は声だけでなく全身を震わせながら勇者に懇願する。

「なら、契約書にサインしてください、王様。それであなたの望みを叶えましょう。ただし、一度契約を結べば、契約書を破ろうが何をしようが絶対に私との契約は無効にならないので、忘れないでください」

今更何を迷うことがあろうか、と王様はクシャクシャにしまったコピー用紙を広げ直し、契約書を壁に押し当てて、ボールペンで署名欄に自分の名前をサインした。

「これで契約成立ですね。契約書の方はそちらでお持ちください」

「では、勇者様に今の我々の状況を説明しますと、この城は魔王軍に包囲されて陥落寸前。人間界には魔族の多数の侵略拠点が作られており、人間界自体が危機に瀕していると言っても過言ではありません。更に、魔王の城には国王様の娘以外にも、この大陸にある七カ国全ての王族のご子息や令嬢が合計で二十四人も囚われております。そのため国を動かす国王様は子供の身の安全が心配で、魔王軍に対して強い姿勢で反撃ができず、結果ここまで追い込まれてしまいました。なので、勇者様には魔王城に囚われた湖の国の姫様を救い出し、魔王軍を人間界から追い払ってこの世界を救ってほしいのです」

涙で言葉を詰まらせた王様の横に立っていた大臣が、ゴマを擦るように両手を合わせながら勇者に依頼の内容を説明する。

なるほど、と勇者は中指で銀縁眼鏡の鼻あての部分で軽く押し上げる。

「依頼内容を確認しますと、人間界からの魔族の駆逐と囚われの姫君の奪還ですね。これはまた定番ネタときたものだ。そのコースだと私の勤務時間は一時間で終了となりますのでご了承を」

そう言って、勇者はデジタルの腕時計をタイマーモードにして、タイマーを一時間にセットする。

「なん……だと……。まさか、たった一時間でこの状況を何とかしてみせるというのか!？」

ええ、と勇者は機械的に作られた営業スマイルを絶やさぬまま頷き、部屋の外へと通じる扉に歩いていく。

「待たれよ、勇者。いくらお主が世界を救うほどの力を持った者だとは言え、何の装備も持たずに魔王に挑むのは厳しいだろう。ワシが所有する限りで最大級の力を持った業物を用意した。それを持っていくがいい」

目から流れる涙と鼻水をハンカチで拭き、冷静さを取り戻した王様は勇者を呼び止めた。

歩みを止めた勇者の前に、竜の鱗で作られた白銀の鎧、雷の力が宿った剣を携えた王様の部下達が傳く。

勇者はそんな光景を見て、初めて世界を救う旅に出た時はもっと安っぽい装備で、王様から百ゴールド、槍の棒と鍋の蓋を賤別にもたされたことを思い出した。

今にして思えばブラック企業も驚く待遇の悪さだった、と勇者は懐かしい過去の思い出を振り返る。

そして、勇者は機械的な営業スマイルを一瞬だけ崩してはにかみ、「いえ、支給品

の装備は結構です。こう見えても私、結構強いので」と右手を前にかざして王様の申し出を丁重に断った。

何を考えているんだ、こいつ、と王様やその部下達は啞然とした表情で勇者のことを見ている。

そんな人々を尻目に、勇者は平然と扉を開けて城の廊下へと出ていった。

2

一階にある城の大広間は二つの勢力に分かれた兵士達の喧騒に包まれている。室内は血と泥で汚れ、家具は床へと倒れて、その上を歩く兵士達によって踏み碎かれていく。

人の姿をした兵士の数は異形の兵の数よりも少なく、苦しい戦いを強いられている。

この最終防衛線が破られたが最後、城の中に隠れている人々が魔王軍の毒牙にかかって蹂躪される。

この絶望的な状況の中でも、城の兵士達は愛する者や忠義を尽くすべき相手を守るために、城の奥へと続く階段や廊下を塞ぐようにして魔王軍の前に立ち塞がり、死力を振り絞って戦闘を続けていた。

グギャー、と敵味方入り乱れる戦場の中で一人の男の叫び声上がる。しかし、すぐに剣と楯がぶつかる音や鎧の擦れる音、荒々しい足音や他の者の上げた悲鳴などの騒音によって掻き消されてしまう。

先程叫び声を上げた新兵のジャックは、膝に矢を受けて地面へと倒れてしまっていた。

畜生、これじゃあまともに動けねえ、とジャックは矢を受けた右膝に激痛が走って顔を歪める。

「帰ったら恋人のサリーにプロポーズの返事を聞いて結婚するはずだったのに。これじゃあ結婚しても就ける職が城の門番とかしかないじゃないか。いや、というか、このまま俺は死ぬのかよ。最後に大好きだった彼女特製のパインサラダをたらふく食っとけばよかったぜ」

ジャックは死の危機に瀕して痛覚が麻痺していき、悪態を吐き出す余裕もなくなって、客観的に物事を捉えて戦場の様子を見るようになる。

戦場では巨大な斧を持った竜の姿の化物が、デタラメに斧を振り回して自分の仲間達を次々に虐殺していく。

あんな化物に殺されるのと、このまま誰かに踏まれて死ぬのだけは絶対に嫌だぜ、とジャックは死にそうだった土壇場で生への執着心を発揮し、這って乱戦状態の戦場から離脱しようとする。

そして倒れた地点から三メートルほど進んだところで、ジャックは人が入り乱れる戦場の中に、本来はいるはずのない不自然な存在を見た。

それは黒い靴であり、黒い布地のズボンを穿いた男の脚だった。

「おいおい、こんな世界一物騒な所に鎧も着ないでいるような奴がいるとすれば、そいつは死神か。死神が見えたってことはいよいよ俺もおしまいかな。まだ死にたくないのに勘弁してくれよ」

ジャックの口から乾いた笑いが漏れる。

しかし、死神と思われたその男の手には人の命を狩る形をした大鎌は握られておらず、その代わりに黒い鞆を提げていた。

そして、死神は鞆を持ったまま両手を口の横に当てて何かを叫ぼうとした。

何かが変わだ、とジャックが思った矢先、彼の視界は暗転する。

それから先のことをジャックは良く覚えていない。なぜならジャックは気絶してしまっただからだ。

しかし、次にジャックが目を開けた時に待っていた知らせは二つ。戦争の終結と彼女からのプロポーズをオーケーした返事であった。

火竜将軍は全身を炎のような赤い鱗に覆われたトカゲに似た姿をした種族である。その背丈は二メートルを超える超重量級の体格をした魔族であった。

全身を覆う鱗は鎧の役割を果たし、筋肉を鋼のように鍛え上げた大男が剣で斬りかかっても、その肌には傷ひとつ付けることができない。更に、その鱗は魔法を弾く性質があったため、遠距離からの魔法攻撃も効かなかった。

火竜将軍の持つ牙や爪は業物の剣よりも鋭く、素手だけで全身を鎧で覆った相手を殺すことができた。また、その腕力も大変強くて、素手で大岩を砕くこともできた。

その生き様は阿修羅の如く、火竜将軍の通った跡には草の根ひとつ残さない。

白兵戦においては火竜将軍こそが、この世界で最強の存在である。

火竜将軍は強敵との戦いの中に刹那の快楽を求め、後方から自分の軍を指揮することをよしとしない。軍の指揮系統を副官に任せて、自分も味方の兵と共に前線に混じって、人間の兵士達を血祭りに上げていた。

「俺の後に続けよ、お前ら。遅れたらぶっ殺すぞ」

火竜将軍は雄叫びを上げ、得物である重厚なハルバードを軽々と振り回す。

それは体長が二メートルを超える火竜将軍に合わせて作られた特注品である。その柄は巨大な鉄柱のような太さで、先端には分厚い鉄塊の如き厚さの刃が付いているハルバードだ。

ハルバードの刃はロクに手入れがされておらず、人を斬れるような状態ではなかった。だが、火竜将軍の並外れた筋力によって生み出されるパワーとスピードにより、ハルバードの刃に触れた物は、人間だろうが石柱だろうがおかまいなしに粉々に爆散していく。

火竜将軍は草刈りをするような仕草で巨大なハルバードを振る。目の前にいた人間の兵士達の上半身が紙切れのように消し飛んだ。

「ガハハ、これで百人斬りだ」

上機嫌な火竜将軍は牙を見せて残虐な笑みを浮かべ、このまま城の兵士達が守る防衛線を突破して城の奥へと進もうとした。

しかしその時、戦場の中から「すみません。少し私の話を聞いていただけないでしょうか」と戦場の騒音を上回る程の男の声が響き渡った。城の大広間にいた兵士達は何事かとその動きを一旦止める。

一メートル離れた先の声が聞き取れないほど騒がしかった戦場が一瞬にして静寂と血と鉄の匂いで包まれる。傷を負って体が弱っていた者は男の大声を聞いて意識を失う。

声が聞こえた方を見れば、いつの間にか大広間の中心にはスーツ姿の男が立っていた。

何者だ、と思うより先に目の前の敵に剣を振り下ろそうとした魔王軍の兵士がいた。しかし、その者の手には既に剣がなく、その手には剣の代わりに名刺が握らされていた。

その兵士が自分の手に剣がないことに気が付いた時、剣を握ったスーツ姿の男がいつの間にか隣に立っている。

目の前で起きている出来事を理解できてない兵士は、自分の手の中に剣がないことに気が付いてあたふたと辺りを見回す。

この戦場にいた者達の中で唯一、火竜将軍だけがスーツ姿の男が何をしたのか理解していた。

勇者は一瞬で剣を振り下ろそうとした兵士に近付いたかと思えば、兵士の手から剣を取り上げ、胸ポケットから紙切れを取り出して剣を奪った兵士の手にもそれを握らせる。それら一連の動作を勇者はコマ数秒の間に行っていた。

数々の死線を潜りぬけてきた武人であるワシでなければ見逃していた、と火竜将軍は謎の男の取った行動に舌を巻く。

この瞬間、広間にいた全ての者達が戦いを止め、突然戦場の中に現れた謎の男に注目していた。

「どうも初めまして。異世界から召喚されました、派遣勇者をしております。田中霸王と申します。以後お見知りおきを」

ゴホン、と勇者は咳払いをしてスピーチの間を取る。

「厚かましいお願いで申し訳ないのですが、魔王軍の皆さま。この城を落とすことを諦めて、ご自身の故郷へと帰ってくれないでしょうか。つまり私、停戦協定を結びたいと考えております」

ふざけるな、と興奮した魔王軍の兵士が勇者に斬りかかろうとした。しかし、気が付けばその兵士の持っていた剣はいつの間にか名刺に変わっており、勇者の手に持つ剣が一本から二本に増えていた。

「ええ、私、争い事を好むような人間ではありません。ですから、できれば穏便に争い事を解決したいのですが、もしそれが叶わないようであれば、多少の実力行使も辞さない構えであります」

やれるものならやってみろ、と空気の読めない一兵卒が勇者に挑もうとした。

だが、その者の剣が名刺に変わるよりも先に、火竜将軍が「待たんか！」と勇者と一卒兵との間に止めに入る。

「ハケン……覇剣の勇者と言ったか。お主、相当の剣の使い手と見た。このワシと一対一で勝負をしてもらいたい」

勇者の自己紹介を聞いた火竜将軍は、派遣という言葉の意味を覇道の道を歩む剣士の略称だと勘違いしていた。

平和的な解決は無理ですか、と勇者は溜息を吐く。

「まあ、構いませんよ。見たところ、そこのあなたがこの中で一番強くて偉そうですし。あなたを倒せば他の方々の士気も下がって撤収してくれるでしょう」

「ならば、その手に持つ剣を構えよ。覇剣の勇者」

火竜将軍は勇者に向けてハルバードを縦に構える。

これからただならぬ戦いが始まることを察知した兵士達は、一旦剣を収めて両者の戦いを遠くから静観する。

「あいにく、私は無益な殺生を避ける主義なのでこの剣は使いません」

勇者は片手で持っていた二本の剣を地面へと捨てた。

その代わりとってはなんですが、と勇者はビジネスバックの中から紺色の折り畳み傘を取り出す。そして、柄の部分伸ばして傘を開かずに火竜将軍に向けて構えた。

「剣を使わずにこのワシを倒すだと。そのような細い棒切れで何ができる！」

「あなたを倒すだけなら、この妻の選んでくれた愛傘、定価三百円の傘だけで十分ですよ。それにどうやら外は雨みたいです。雨に濡れないためにも傘は必要です」

静寂が訪れた大広間で耳を澄ませてみれば、ザアザア降りの雨音が建物の外からしんみりと聞こえてくる。

「ふざけるのもいい加減しろ！ それに先程の茶番は何だ——どうして敵の剣を取り上げるだけで、命を取らない？」

「初対面の人間に対する名刺交換というのは、企業戦士にとって大切なマナーだという理由があります」

「人をからかわずに真面目に話さんか！」

「私は真面目に話をしているのですがね。私が人を殺さない理由ですか……私の住む世界にこんな言葉を行った人がおりましてね。『一人殺せばただの人殺し。十人殺せば連続殺人鬼。一億殺せば英雄だ』と。しかし、人間を一億人も殺せば、それはただの歴史に名が残る大量殺人鬼でしょ。だから私は、大勢の人を殺して、歴史に悪名が残るようなことを避けたいのです。それにこの仕事、大衆に対するクリーンなイメージが大切ですから」

もういい、と勇者のどこまでも人を小馬鹿するような説明に怒った火竜将軍は両手を振りかぶる。そして、一気に間合を詰めて勇者に向かってハルバードを全力で振り下ろした。

勇者は火竜将軍の攻撃を回避する素振りを見せない。折り畳み傘を頭の上で開き、雨を避ける布地の部分でハルバードの一撃を正面から受けた。

何だと、と火竜将軍はハルバートの柄から伝わってくる奇妙な違和感に顔を歪ませる。

火竜将軍の全体重と腕を振る勢いが乗ったハルバートの重たい一撃を受けたことで、勇者の立っていた床が砕けて地面が十センチほど陥没した。

しかし、勇者の手に持った折り畳み傘はバラバラに砕け散ることなかった。元の形を保ったままハルバートの重みに耐え、勇者は涼しげな顔を浮かべて傘を差し続けている。

傘とハルバードが正面からぶつかった状態から、火竜将軍は全身の筋肉を使ってハルバードを傘の布地に押し込み、傘の布地を破って勇者の体を引き裂こうとした。だが、いくらハルバートを握る手に力を込めても勇者の体は一ミリも動くことがなかった。

なぜなら、勇者の魔法によって折り畳み傘の強度と硬度が大幅に強化されていたため、今のこの傘はロードローラーに轢かれても壊れることはない。

そんなことを知るはずもない火竜将軍は、勇者のか細い体に秘められた凄まじい筋力に驚きを隠し切れず、目の前にいるスーツ姿の男に本能的に恐怖を感じていた。

だが、火竜将軍の心の中では恐怖よりも武人としてのプライドが勝り、意地でもこの布の壁を破ろうと躍起になった。

「では、今度はこちらの番ですね」

そう言って、勇者は傘を持っていた手を素早く頭の上に上げる。

勇者の傘に押し返されたハルバードは火竜将軍の頭上へ戻り、彼の胴体ががら空きになってしまう。

火竜将軍は慌ててハルバードを構え直そうとしたが手遅れである。

勇者は傘を開いたままの状態では彼の腹部に向かって突きを放った。

傘の丸くなっている先端部分が火竜将軍の肌に触れた瞬間、物凄い爆発音が起こったかと思うと、彼の体は弾丸のような勢いで後方へ吹き飛ばされた。彼の体は壁に激突するが、そのまま壁を突き破って後ろに進む。二枚目の壁を突き破った時に火竜将軍は吐血して、握っていたハルバードを手放してしまう。そして、三枚目の壁に大きなクレーターを作ってようやく彼の体は停止した。

火竜将軍は腹部と口から血を流しながら白目をむいて気絶している。

「これぞ会心の一撃。まあ、死なない程度に手加減いたしました」

そう言って、勇者は緩慢な動作で傘を頭の上に差し直す。

「ああ、でも、返り血でスーツが汚れると、スーツのクリーニング代を負担しなければならぬので勘弁ですね。そう考えると、血の雨を浴びないためにも傘は欠かせません」

と勇者は火竜将軍を倒した後に独り言を呟いて、べっとりと返り血の付着した傘をくるりと回した。

今しがた起こったこの一方的な勝負の結末を見届けた兵士達は、呼吸を忘れてその場に呆然と立ち尽くしている。

では行きますか、と勇者は城の外に通じる扉に向かって一步を踏み出した。

魔界最強と謳われた火竜将軍の敗北。

士気の喪失により放心状態であった魔王軍の兵士達は、勇者の足音を聞いて我に戻る。そして、勇者が外に向かって動き出すのを、自分達に向かってくるのだと勘違いした魔王軍の兵士達は、持っていた武器を捨て「助けてくれ」と情けない悲鳴を上げながら城の外へと一目散に逃げていった。

魔王軍の敗走を見た城の兵士達は「助かったぞ！ ありがとよ、勇者」と喜びの声を上げ、万歳をしてスーツ姿の勇者に感謝する。

その歓声を聞きながら、勇者は傘を差して雨が降る戦場の中へと向かうのだった。

ドクロ元帥は元人間の魔族であった。

人間だった頃の彼は、王宮に仕える魔法使いとしてその力を奮い、王国で彼の名を

知らぬ者はいないと言われるほどの若き天才魔法使いであった。

しかし、才能というものは劣化するものである。

若くして天才魔法使いという称号を欲しいままにした彼も、年を取るごとにその才能は衰えていった。

しかし、彼には自分の力が衰えていくという事実を受け入れることができなかつた。

自分の魔法の才能を全盛期の状態で保ちたいという狂気に取り憑かれた彼は、自分の持つ魔力を増大させるために魔導書に記されたあらゆる儀式を試し、遂に禁忌とされた方法に手を伸ばす。

それは自分を慕っていた者全ての魂を悪魔に引き渡し、自らが不老不死となる契約を結ぶという方法であった。

その結果、国民の全てが死に絶え、栄えていた王国は一夜にして滅亡した。

不老不死となったことで魔力の減少が止まり、全盛期の頃の若さと力を取り戻した彼であったが、もはやそのことを祝ってくれる者は誰一人いない。

取り返しのない過ちを犯してしまったことに気が付いた彼は、無人となった町の中で三日三晩泣き続け、四日目の朝に彼の心は壊れてしまった。

自分が今以上の大魔法使いになれば失った命を取り戻せると考えた彼は、更なる力を求めて人間の住む世界を去り、魔界の奥地で魔法の研究をするようになる。

それから三百年の時間が経ち、彼は脳の記憶の限界を超えて過去の記憶や目的を忘れてしまっても、何かに取り憑かれたかのように魔法の研究を続けていた。

そして、ある日、魔界の奥地に如何なる奇跡を叶える魔術師がいると聞き付けた魔王は、彼の元に使者を送って魔王城へと招待した。

だが、人間だった頃の記憶をほとんど忘れてしまった彼にとって、仕える相手が人間か魔族かなど関係なかった。ただ、魔法の研究のために、如何なる協力も惜しまないという魔王の提案に心が惹かれた。

しかし、魔王の「賢者の名前は何か？」という問い掛けに対して、彼は答えに困った。

何しろ彼は三百年以上も自分の名前を名乗る機会がなく、自分の名前でさえ忘れてしまっていたからだ。

これから魔王の元に仕えるのであれば、礼儀として魔王の質問に答えねばならない。ここでちょうど自分の近くに飾ってあった鏡を覗き込んだ彼は、鏡の中にかつて自分が契約した悪魔とそっくりな顔が映っていることに気付くのであった。

彼は悪魔と契約して不老不死となった。しかし、長年に渡って寝食を忘れ、風呂にも入らずに一心不乱になって魔法の研究を続けた彼の体は、筋肉や内臓が溶けてなくなっていた。

全盛期以上の膨大な魔力を得た代わりに、彼は骨のみが残った存在となっていたのだ。

故に彼は魔王に向かってこう名乗った。

私は単なるドクロです、と。

こうして魔王の元で働き始めた彼は、たった一人で小国ひとつを落とすなど、人間であった頃以上の偉業を瞬く間に成し遂げる。

そして、遂にはドクロ元帥と呼ばれるようになったのだ。

そんな魔界一の実力者であるドクロ元帥は、今回の人間界への遠征軍の総司令官に任命された。

ドクロ元帥は黒いローブに身を包み、体中を高価な宝石で着飾って椅子に座っている。湖の国から少し離れた丘の上に設置されているテントで戦闘全体の指揮を取っていた。

「報告です、ドクロ元帥様。我が軍の被害は一万を超えました。このままでは戦線が維持できません」

テントの中に入って来た部下からの報告を受けて、ドクロ元帥は低い唸り声を上げながら頭を抱える。

何がどうなっているのだ、とドクロ元帥はこの戦場で起こった不可解な現象を整理

しようとする。

魔王軍は三万の軍勢を用いて、城に立て籠もった三千の人間の兵との籠城戦を行っていた。軍隊の数も力も魔王側が圧倒的に有利で、すぐに戦いの決着が付くと考えていた。なのに、魔王軍の勝利間際で、突如として大量の兵士が負傷したとの情報が入ってくる。

部下からの報告によれば、相手は人間側が異世界から召喚した勇者らしい。

執事のような格好をした存在は、破圏の勇者と名乗ったという。衝撃波を放って魔王軍の兵士を宙へと吹き飛ばし、たった一人で一騎当千を超えた働きを示す。その名の示す通り、自分の周りの物を全て破壊する有り様は、破壊神の名に相応しい異名である。

そんな破圏の勇者は音速を超えたスピードでドクロ元帥の元へと向かっていた。

ドクロ元帥は一万人以上の味方の負傷という報告を聞いて、これは人間界を侵略する上で手痛い損害であると悲しんだ。

これ以上の損害を許してしまえば、人間への侵略が大いに滞ってしまう。

こうなれば自らが戦場に赴いて戦いの流れを変えるしかない、とドクロ元帥が思った矢先に嵐の時のような風音が聞こえて、彼が滞在していたテントが根こそぎ高くへと吹き飛ばされる。

「どうも初めまして。異世界から召喚されました、派遣勇者をしております。田中霸王と申します。以後お見知りおきを。こちらにこの戦争の総指揮を任されているドクロ元帥がいると聞いて伺ったのですが、その方はいらっしゃいますか？」

激しい雨の中で紺色の傘を差しているスーツ姿の勇者は、ドクロ元帥に向かって礼儀正しくお辞儀をする。

雨の中、ぬかるんだ地面の上を駆け抜けてきたというのに、勇者のスーツは泥や返り血で汚れておらず、新品同様に綺麗なままだ。

「そちが我が軍を壊滅に追い込もうとしている破圏の勇者か」

ドクロ元帥は雨に濡れながら勇者と向かい合う。その間の距離は十メートルほど。

自分の周りに控えていた部下達は恐怖のあまり、蛇に睨まれた蛙のような表情をして、その場に立ったまま動けずにいた。

「はい。あなたがドクロ元帥ですか。見た目通りの名前でございますね」

と勇者は機械的な笑みに近い営業スマイルを見せる。

「用件を述べてみる」

「私、湖の国の王に依頼されて、この戦争を終わらせなければなりません。故に、もしよろしければこのまま軍を引いて魔界へと戻ってこないでしょうか？」

お断りだな、とドクロ元帥は強い遺憾の意をもって勇者の申し出を拒絶する。

いくら一人で一万もの兵を倒すことができる勇者が現れたとは言え、この者さえ倒してしまえば人間軍はロクに魔王軍に抵抗できる手段が残っていない。

ならば、自分が目の前にいる諸悪の根源を倒してしまえばいいと考えたドクロ元帥は、勇者に向かって問答無用で巨大な火球を放った。

勇者はドクロ元帥の攻撃に対して避けるような動作をせず、まともに火球の中に全身を入れることとなる。

「話をする前から交渉決裂ですか」

と炎の中から勇者の残念そうな声が聞こえる。

やりおるな、とドクロ元帥は両手を叩いて勇者が生きていることを褒める。

今の攻撃は火球に当たった対象を消し炭にする程度の威力に調整させていた。

雨の混じった突風が吹き荒れて炎を掻き消す。

雨の水分が蒸発して白い蒸気を上げている地面の上で、勇者は無傷で立っていた。

「どういう魔法で体を守っているのだ？」

「おそらく、巫女さんによる加護の力ではないでしょうか」

自分の攻撃は巫女一人の祈りで防げるようなものではないと、ドクロ元帥は勇者の力の謎を冷静に分析する。

「貴様、一体どれほどの数の巫女に祈られている？」

「さあ、今まで救った世界の数だけ巫女さんに祈られていると思うのですが。何し

ろ、新卒生が就活サイトで調べた大企業に軒並みエントリーしているようなもので、いくつ世界を救ったかなんて正確には覚えておりませんね。大手の神殿をざっと数えてみても百以上、中小レベルを含めればもっとあるかと」

「どういう意味だ？」

「つまり、人が毎日食べている食パンの数を覚えていないのと、同じようなものです」

「貴様の力の正体に興味が湧いたぞ。生け捕りにして実験材料として研究したい」

「申し訳ございませんが、実験材料になるサービスは実施しておりませんのでお断りしています。私といたしましては、早く戦争を終結されて残りの仕事に取り掛かりたいので、全力で掛かってきてくださると幸いです」

ドクロ元帥は白骨化している両手を天に掲げた。

「この攻撃は避けられもせんし、防ぐこともできんぞ」

ドクロ元帥は勇者の挑発にあえて乗り、両手を地面へと振り下ろして大火力の魔法を放つ。

裁きの雷、とドクロ元帥は呪文を唱え、空が光ったかと思うと、稲妻が勇者の頭上に落ちて、後から雷鳴が轟いた。

落雷を受けて、勇者の立つ地面は真っ黒に焦げて白い煙を上げていた。しかし勇者自身は無傷のまま、手に持っていた傘の布地が黒焦げになっただけだった。

音がうるさいですね、と勇者は両目を瞑って落雷があったことに驚く。

「流石にこの定価三百円の傘も雷には耐えられませんでしたか。仕事が終わった後に新しい物をデパートに行って買わないと」

勇者は布地が燃えてなくなってしまった傘を地面に捨てる。

後の世で世界を救った勇者の功績を讃えて神殿が作られた時、何気なく捨てたこの傘の残骸が神器として崇められることを、この時の勇者はまだ知らない。

なぜ生きている、とドクロ元帥の開いた口が塞がらない。

「今の攻撃を受けて無事でいられる人間など、この世界に存在するはずがない」

「雷に打たれた程度で死ぬようであれば、勇者失格です」

勇者の回答は全く質問の答えになっていなかった。だが、それでもその理不尽な勇者の存在自体には、有無を言わさぬ説得力があった。

「いけない。これでは雨に濡れてスーツが駄目になってしまう」

勇者は雷に打たれたことを気にも留めず、頭や肩を雨に打たれながら片手を天に向けて掲げる。

ハッ、と勇者が叫んで空に向けた手から光線を放った。

勇者の手から放たれた光線は一直線に空高く伸びていき、黒い雨雲を貫通して宇宙まで届いた。

その結果、光線が通過した場所を中心として雲が円形状に消え去り、戦争が行われている地域全体の空が雨から一転して晴れ渡った。

戦場にいた兵士達は、今まで降っていた雨が止み、空が急に晴れ渡る様を見て、誰もが戦うのを止めた。そしてしばらくの間、兵士達は雲ひとつなくなった綺麗な青空を見上げていたのだった。

雲に穴を空けて雨模様の天気を青空に変えることなど、ドクロ元帥の力をもってしても不可能であった。

ドクロ元帥は三百年以上にも渡る魔法の研究の集大成をもってしても、精々大自然の力を利用して雷の落下地点を操るとこまでが限界だった。しかし、勇者の力は大自然の力を上回っており、自らの力だけで天候を変えてみせたのだ。

天才が三百年以上努力し続けても辿り着けない歴然とした実力の差を見せつけられ、ドクロ元帥は両膝を泥の上に着ける。

この瞬間、ドクロ元帥がこれまで築き上げてきた自尊心やら魔法に関する自信が、彼の心の中でガタガタと音を立てて崩れていった。

これでスーツが濡れずに済む、と勇者は満足げな顔で雨に濡れた眼鏡を、胸ポケットに入れていたハンカチを使って拭く。

穴の空いた雲の隙間から降り注ぐ太陽の光を受ける勇者の姿は、神々しくて一枚の

絵になりそうなくらい様になっていた。

「あなたが神か……私を弟子にしてください」

己の敗北を悟ったドクロ元帥は両手を胸の前で合わせて、神に祈るようなポーズを取り勇者に教を請うた。

「弟子と言われましても……私は人にもものを教えるのが苦手です。それに今、私は勤務中の身で時間がありません。申し訳ありませんが、あなた様の依頼はお受けすることができません。しかし、また時間のある時に他の用件でしたら私も考慮しますので」

そう言って、勇者は自分の連絡先が書かれた名刺を、地面に跪いているドクロ元帥に渡した。

その際に、勇者はドクロ元帥の白骨化した手に触れて、読心魔法を使って魔王軍に関するあらゆる情報を読み取った。

「おお、神よ。感謝します」

「私はただの派遣社員で、まだ神にはなっていないのですが」

勇者は自分を神と崇めてすがり付こうとしてくる骸骨に対して、少し困惑した表情を浮かべる。

「まあ、そちらに戦意がないということであれば、軍を引き上げてこの戦争を止めてください。私には次の職場がありますので」

「畏まりました、神よ」

ドクロ元帥は深々と頷いて勇者から手を放し、通信魔法を使って全軍を撤収させる準備を始める。

「では、私には次の職場が待っていますので」

勇者はドクロ元帥が他事に気を取られている隙に、飛行魔法を発動して雲の上まで浮かび上がる。そして、そこから音速を超えるスピードを出して次の現場へと向かった。

5

湖の国の姫様は幼い頃に母親と兄を亡くしたため、父親である国王や周りの使用人達に大変甘やかされて育てられた。

結果、その容姿は湖の国で一番美しいと言われるまでの美少女に成長したが、その性格は七つある王国の中で一番我儘な姫様であるという評判が大陸中に轟いていた。

そんな姫様は魔王の策略によって魔王城へと幽閉され、両手両足を鎖で繋がれて自由を奪われた状況の中でも希望を捨てずにいた。

なぜなら十六年間、何不自由なく甘やかされた環境で育った彼女にとって、このような不測のアクシデントでさえも、退屈な人生を彩るスパイス程度にしか感じていない。それほどに彼女の頭の中はとってお花畑な作りになっていたからだ。

そんな姫様の今の夢は、魔王に囚われた自分を異世界から来た勇者に救ってもらい、その彼と結婚して幸せな家庭を築くという、純情な女の子らしい夢ではあった。だが、姫様の理想とする男性像は高過ぎたため、彼女の婿探しは世界を魔王の魔の手から救うこと以上に難航していたのだった。

しかし、その夢もあと少しで叶いそうな兆しが見えてきた。

王座に座る魔王の方を見れば、何やら神妙な顔つきで考え込み、ブツブツと独り言を呟いたりしている。

どうやら人間軍との戦争で大きな変化があったらしい。湖の国の王様が異世界から勇者を召喚したという情報が魔王の耳に入ってきていたからだ。

姫様の近くには他の国からさらわれてきた王族の子供達が全員揃っていた。姫様以外の他の子供達は焦りや不満、恐怖や悲しみを覚えたような表情を浮かべている。

しかし、姫様だけは希望に満ちた表情で、イケメンの勇者が自分を助けにくるのを信じて待っている。

「流石はお父様。もうすぐ勇者様が魔王の元から颯爽と私を助け出してくださるの

ね」

姫様は自らのおかれた悲劇のヒロインという境遇に酔いしれ、早くも魔王を倒した勇者とのラブロマンスに妄想を膨らませる。

歴史になれば昔から、魔王に囚われた姫様を救い出した勇者は彼女と両思いとなり、国王や国民から祝福されて結婚し、次期国王となって幸せな家庭と国を築いていくものであると言われている。

「きっと力が強くて、背が多く、細身で、紳士的で、顔立ちも私好みの知的な感じで、異世界の神秘さを感じさせる黒髪で、年上で、性格とかも素敵な殿方なのだわ」

姫様は頭の中で想像した理想の勇者像を口から垂れ流し、目を輝かせて自分で自分の体を抱き締める。

そこから妄想が飛躍し、結婚してから何人子供を作るのかという話になった時、天井が崩れ落ちて瓦礫が室内に降り注いできた。

姫様や囚われの身の他の子供達が驚いて悲鳴を上げる。

しかし、落盤は部屋の中央だけの局所的なもので、魔王や人質がいる所には天井が落ちなかった。

気が付けば天井に空いた穴から太陽の光が射し込み、そこから空中に浮いていた勇者が室内に降りてくる。

「なんて素敵な衣装なんでしょう。まるで執事の衣装みたい。でも、執事の勇者とお姫様の禁断の恋なんていうのも素敵ね。これぞ私の想像していたシチュエーション通り、理想の勇者様だわ」

勇者の着ている衣装を見た姫様は恍惚とした表情を浮かべ、感嘆の吐息を零す。

これで助かる、と勇者の登場を目の当たりにして他の子供達の目に希望の光が宿る。

一方で姫様は完全に自分の世界に没頭し、周りの音を遮断して勇者と自分との出逢いの妄想に花を咲かせていた。

「時間がなかったなんて言っちゃって、それほどまでに一刻も早く私を助けたかったのかしら。空から魔王城に入ってくるなんて、登場の仕方がキザなんだけども、そこが最高なのよ」

姫様は独り言を呟きながら胸をときめかせ、勇者のことを見つめている。

「けど、勇者様が私の方を見てくれないの。きっと私の輝かしいばかりの美貌に照れてしまって、素直にこっちを見れないせいなのよ。鎖が邪魔で勇者様の元に抱きつけにいけないし、早く魔王なんか倒して、お姫様だっこをして甘い愛の言葉を囁いてよ」

だが、姫様の独り言は勇者まで届いていない。

ならば、と姫様は声のボリュームを上げ、魔王と向かい合っている勇者に自分の存在をアピールする。

「きゃー、勇者様！ 早く囚われの私をここから救い出して！」

姫様の言葉に反応して勇者の背筋が真っ直ぐに伸びる。

「勇者様が私の言葉に反応したわ。でも、勇者様がこっちを見てくれないの」

勇者は何やら魔王と向かい合い、右手を耳元に当てて喋っていた。しかし、姫様から彼までの距離が離れていたため、姫様達の方には会話の内容が聞こえてこない。

「きっと、魔王と勇者様とで私のことを取り合っているのだわ。いけないわ、愛する二人が私を巡って対立するなんて。けれども、魔族と人間、魔王とお姫様、種族も立場も超えた禁断の恋というもの有りかもしれないわね。ああ、でも、知的で凛々しい魔王様というのも捨てがたいけど、魔王様には真面目過ぎてつまらないところがあるし。私はやはり勇者様一筋なの。この気持ちを勇者様に伝えて私は彼と結婚して幸せな家庭を築くのよ」

姫様は自分の頬を両手で叩いて気合を入れる。

「早く、私を忌まわしい鎖から解き放って、勇者様。そしたら私の全てをあなたに捧げるわ。子供の名前ははどうしましょう？」

姫様は謁見の間に響き渡るような大きな声で勇者への愛の告白を告げる。

姫様からの告白を聞いた勇者は、首だけを九十度回転させて姫様の方を見た。

「勇者様が私のことを見てくださったわ。ああ、勇者様のクールで知性に溢れる冷たい瞳。これで彼の視線は私に釘付けよ」

姫様は歓喜に身を震わせて勇者のことを見つめ返す。

さあ、魔王との戦いを終わらせて私を抱き締めに来てくださって、と姫様は勇者に伝えようとした。だが、興奮のあまり声が詰まったせいか愛の言葉が出てこなかった。

あれ、喜びのあまり呼吸を忘れて声が出なくなったのかしら、と姫様は不思議そうに首を傾げる。

ここは一旦、落ち着くために、六十秒数えてから深呼吸をして、そしたら勇者様に愛の言葉を伝えるの、と姫様は目を閉じて数をカウントし始める。

でも、もしも目を開けた時に勇者様の唇が私の顔の前にあったなら、人生最大の驚きで心臓が止まってしまうわ、と姫様はピンク色の邪念に頭を支配されながら六十秒を数えていた。

しかし、途中で誰かが自分の肩に手を置いた感触がしたので、目を開けて確かめてみる。

すると、姫様の前には目に大粒の涙を溜めた湖の国の国王がいた。

なんでお父様が、と姫様は驚いて周りを見渡してみる。

部屋の中には国王以外にも家臣や他のさらわれた子供達があり、そこは自分の住み慣れた湖の城の中だった。

「じ、じんばいしたんだぞ」

感極まってボロボロと涙を流した国王は姫様の脇腹の横に腕を差し込んで彼女を抱きついた。

『私は大丈夫よ、お父様。それより他の皆さまが見ている前ですから、離れてちょうだい。はずかしいですわ』

と今のこの状況が呑み込めないながらも、姫様は言葉を作って父親に自分の意見を伝えようとする。

しかし、姫様の口から声が出ることはなかった。

「もういい、何も言うな、娘よ。お前の言いたいことは全部分かっておる」

なら勇者様はどこなのよ、と姫様は魚のように口をパクパクさせて喋ろうとするが、彼女の思いは声にならない。

「魔王城での囚われの生活はさぞ苦しくて辛いものだっただろう。だけど、もう何の心配もいらぬ。魔族との戦争は終わったんだ。勇者様がお前を魔王の元から取り戻し、世界を救ってくれた」

そう言って、王様はより一層姫様を抱き締める腕に力を込め、彼女を自分の胸の中に抱き寄せた。姫様の顔が王様の胸の中に埋まって呼吸ができなくなる。

く、苦しいわ。アバラが折れる、と姫様は腹部を圧迫される痛みで涙を流し、声が出ないことに戸惑いながらも王様の背中を引っ張って自分から引き剥がそうとする。

しかし、娘を抱き締める王様の力は凄まじく、必死の抵抗も虚しく徐々に彼女は父親の胸の中で大人しくなっていく。

二人の周りにいたギャラリー達は父と娘の感動の再会というムードに浸っていて、誰も姫様の異変に気付く者はいなかった。

それどころか彼らは、「おめでとう」と互いに抱き締め合う親子を祝福して拍手を送る。

誰か助けて、声が出ない、もう駄目——と姫様の意識はそこで途切れた。

それからしばらくして姫様の意識が戻った後、彼女の声は魔王の呪いによって奪われてしまったことが発覚する。

湖の国の王様は自分の持てる財力や人材を駆使して、姫様に向けられた呪いを解こうと努力をした。けれども、結局この呪いを解くことは姫様が死ぬまで叶わなかった。

しかし、結果的に声を失ったショックからか姫様の我儘な性格も多少は改善され、何よりお花畑な妄想が彼女の口から零れることがなくなった。

更にこの一件から、魔王に美しい声を奪われてしまった物静かで思慮深くて麗しい

湖の姫君、という噂が大陸中に広がることとなる。

それにより姫様が夢見た理想の勇者とはいかないまでも、それなりに彼女好きな貴族の男と結婚して幸せな家庭を築いたのは、また後の世の話であった。

6

今回の人間と魔族との戦争は百年にも渡って続いており、二つの種族の間に根付いた確執を解消できなかったことが問題であった。

そして、今の時代の戦争を取り仕切る魔族側のリーダーの魔王は、高いカリスマ性と知性を持った歴代魔王の中でも特に優秀な魔王であった。

一等地に城を構え、幸せな家庭を築いて美人の妻と可愛い娘を持ち、朝のジョギングを欠かさず日課とし、常にクリエイティブな気持ちを忘れず、部下からの評価も高く、大勢の家臣を従えてバリバリと働いていた。

そんな仕事一筋である魔王が企画した作戦は見事に成功し、いずれ人間を統べる存在となる王族の子供達を誘拐し、彼らを人質とすることでこの戦争を有利に進め、魔族側の勝利間近というところまで迫っていた。

一体何が起きているのだ、と王座に座った魔王はワイングラスに入った赤ワインを手の中でユラユラと揺らす。

頭に二本の立派な角を生やし、青い肌をした魔王は白地の祭服に似た感じの服を着ており、その顔は焦りと不安で歪んでいた。

十分前に人間界で戦争を取り仕切っていた部下からの定時報告が全て途絶えた。

報告が途絶える前に得ることができていた情報によれば、湖の国と交戦状態だった軍が壊滅した。人間界攻略の拠点となる岩が崩壊。新たに人間界に進軍予定だった軍隊が行方不明。他にも人間界を侵略中だった魔王軍が次々と魔界へ引き返してくるなど、不幸な出来事に立て続けに見舞われている。

また、それら全ての被害は、異世界から召喚されたおかしな格好をした一人の勇者によって引き起こされたものらしい。

このままでは我々が人間に戦争で敗北してしまう、と魔王は親指の爪を噛みながら、何かこの状況を打開できる策はないかと頭を捻る。

憔悴し切った魔王の姿を見せて部下を心配させないために、魔王のいる部屋には部下が一人もいない。

魔王のいる謁見の間には念のための保険として、人間界からさらってきた王族の子供達が奴隷のように鎖に繋がれて並んでいる。

部下の寄こした最後の報告によると、どうやら勇者は人質を助けるために魔王城へと向かっているようだ。

このままでは自分の命が危ないと感じた魔王は、魔王城内に防衛網を引き、勇者の撃退の策を敷いた

一階から四階までのフロアを異界化して広大な迷宮を作り上げ、その中に大量の死霊やらゾンビやら強い魔物などを配備して、魔王のいる謁見の魔まで辿り着くのに百回は死ななければならないようなダンジョンを創造した。更に、万が一、最上階にまで辿り付けたとしても、謁見の間に続く扉の前には百人以上の勇者が束になっても勝てないような強さを持つケルベロスとドラゴンを門番として置き、侵入者に対する守りを万全に固めてある。

この鉄壁の守りを突破できるのなら私の元まで来てみるがいい、と魔王の唇が綻ぶ。

その次の瞬間、頭上から爆発音が聞こえたかと思うと天井に穴が空き、瓦礫が謁見の間に降り注いだ。

その場にいた者は全員悲鳴を上げ、瓦礫から身を守るために頭を両手で覆う。

突然の爆発に驚いた魔王も両手で頭を庇うような仕草を取り、手に持っていたワイングラスは床に落ちた。

「皆さん、ご無事でしょうか？」

と天から男の声が聞こえてきた。

何奴だ、と魔王は驚いて叫ぶ。

片手にビジネスバッグを提げ、スーツ姿の勇者が天井に空いた穴から謁見の間に入ってくる。

「どうも初めまして。異世界から召喚されました、派遣勇者をしております。田中霸王と申します。以後お見知りおきを。この度はアポイントメントもなしに魔王城に押しかけてしまい申し訳ありません。何ゆえ時間がなかったもので、一階の玄関から入らずに天井から入らせてもらいました」

勇者は部屋の中心に着地すると、王座に座ったまま動けずにいる魔王に向かって、腰を曲げてお辞儀をした。

私の完璧な防衛網が、と予想外な勇者の登場の仕方に意表を突かれた魔王は言葉が出てこない。

ドレスやタキシードを着た合計二十四人の少年少女達が部屋の隅で頭を抱えて震えている。その中で一人だけ例外的に、恍惚した表情で勇者のこゝろを見つめている姫様がいた。

天井に穴が空いた際に落下した瓦礫のほとんどは部屋の中央に落ちたため、怪我人は一人もでなかった。

どうやら誰も死んではいないようですね、と室内を見渡した勇者は魔王に囚われた王族がこの場に集まっていることに気付き、ほっと胸を撫で下ろす。

覇権勇者——その周りの者に畏怖の念を与える着こなしは、武力、財力、権力を兼ね備えた王族の衣装なのか、と勇者の自己紹介を聞いた魔王は見当違いな感想を抱く。

「突然のお願いで恐縮なのですが、そちらにいる王族のご子息達を、親の元に返していただけないでしょうか？」

「お断りだな、覇権の勇者よ。ここまで一人で乗り込んできたことは褒めてやるが。これまでの戦いで疲れているだろう。そんな状態でこの私に勝てると思っているのか！」

勇者に話しかけられて何か言葉を返さねばと思った魔王は、大物ぶった態度で勇者を威嚇する。

「確かに、分単位のスケジュールをこなしてきましたので、ちょっと疲れましたね。少し休憩いたしますか」

勇者はそう呟いて、魔王の前だというのにビジネスバッグから小瓶を取り出し、蓋を開けて一気に中身を飲み出した。

勇者の緊張感の欠片もない突拍子もない行動に魔王は動揺したが、「ハハハ」と大声で笑って誤魔化する。

「それは何だ、覇権の勇者？ 回復薬の類か？」

「これは栄養ドリンクです。企業戦士はこれを飲んで過酷な仕事と日夜戦っているのですよ。沢山飲めば、徹夜仕事にも耐えることができます。魔界を束ねる王ともなれば、その仕事はさぞかし大変なものでしょう。良かったら差し上げますよ」

勇者は鞆の中から新品の栄養ドリンクを取り出して魔王に勧めてみる。

「面白いことをするのだな。私を前にしても余裕というわけか。しかし、そのような怪しい飲み物などいらぬわ！」

そうですか、と勇者は残念そうに空になった瓶と栄養ドリンクを鞆の中に仕舞う。

その時、勇者の上着のポケットに入れていた携帯電話が鳴った。

「所用が入りましたので、少々お待ちください」

と勇者は魔王に断りを入れてポケットに入れていた携帯を取り出す。

「あまり長くは待たんぞ」

魔王は王座に腰を下ろしたまま、余裕のある態度を装った返事をしつつも、内心ではいきなり勇者との一騎打ちが始まらなかったことに安堵する。そして、どうすればこの化物じみた力を持つ勇者を倒すことができるのかと頭をフルに使って考える。

勇者の所持している携帯は、彼自身の手で異世界に飛ばされていても元の世界の電波を受信できるように改造が施されている優れ物であった。

勇者は携帯のディスプレイに表示された名前を見て反射的に電話に出た。

「もしもし」

と勇者の声が緊張で強張る。

『もしもしあなた？ 私だけど、いつになったらあなたは家に帰ってくるの？ もう夜の八時過ぎよ。今日は六時半には家に帰るって言ってたわよね』

携帯のスピーカーから怒りの感情が籠った女性の声が聞こえてくる。

「ごめんよ、ハニー。今日は仕事を早く終わらせて家に帰るつもりだったけど、家に帰る途中で異世界に召喚されちゃって」

『何が異世界に召喚されて世界を救う勇者よ。別世界をいくら救っても、家の貯蓄は増えないのよ。世界を救う前に、しっかりと働いて私達の家庭を守りなさいよ』

電話の相手は勇者の妻であった。

「僕だって家族を守るために、元の世界でも必死になって働いているさ。それに異世界を救った報酬として土地を集めていけば、いずれ僕は新世界の神となって君達に楽をさせてあげられるから」

『あなたが神様になれるのは百年後、それとも千年後。そんな途方もない夢を見ちゃって。いつも返す言葉に困るとあなたはそればかり。少しは現実を見てちょうだい。異世界から持ってきた財宝は、こちらの世界じゃ換金できないし。異世界に土地があっても不動産で転がせないのよ』

「だから……」

勇者の喉がカラカラに渴き、唇が震える。

『大体私達の世界じゃ、あなたはしががない派遣社員で、お給料も多くない。頻繁に異世界に召喚されるせいで、決まった定職に就くことができない。車や家のローンもまだたんまりと残っている。それでも、もうすぐ娘が小学校に上がって、色々とお金が掛かってくるというのに、これから娘の高校や大学と、あなたはどうするつもりなの！？』

「その……ごめんなさい。今日こそ早く帰るから」

怒り心頭な状態の妻を相手にした勇者は、思わず目の前にいない妻に対して、情けなく平謝りをしながら素の状態で喋ってしまう。

『何がごめんなさいよ。私に謝る暇があったら、さっさと家に帰ってきて私の前で土下座でもしなさい。最近では家に帰ってくる時間も遅いし、謝るってことは何か、私にやましいことでも隠しているんじゃないかしら？』

「そ、そんなことないよ」

電話越しからの妻のあまりに鬼気迫る態度に勇者は言葉を詰まらせる。

『怪しいわね……』

「そんなことないよ」

「おい、勇者よ。そなたは誰と——」

勇者が誰と話をしているのかが気になった魔王は、電話中の勇者に声をかけようとした。

「きゃー、勇者様！ 早く囚われの私をここから救い出して！」

だが、その問い掛けは鎖に繋がれていた姫様の勇者に対する熱烈なラブコールによって阻まれる。

『誰よ、今の女の人の声？』

背筋が凍り付くかのような恐ろしさに満ちた妻の声に、勇者は思考が止まって言葉を一瞬失う。

「今のは、あれだよ。そう、今、僕、魔王城で魔王と戦っていて、囚われたお姫様が僕を応援してくれているみたいなの」

『今の少し考えてから喋ったでしょ。怪しいわね。本当はいかがわしいお店の中にいるんじゃないかしら？』

「そんなことないって！」

「もしや、勇者が話しているのは、そなたのおん——」

「早く、私を忌まわしい鎖から解き放って、勇者様。そしたら私の全てをあなたに捧げるわ。子供の名前はどくししょう？」

先程叫んだのと同じ姫様が、この間の空気を読まずに勇者に向かって再び黄色い声

援を飛ばし、魔王の声を掻き消した。

二度も同じ女に自分が発言する機会を奪われた魔王は、苛立たしそうな表情で貧乏揺すりをする。

『何なのよ、今の忌まわしい鎖とか、私の全てを捧げるとか、子供の名前って！？まさかあなた、私というものがあいながら、いかがわしいお店に通って、浮気までするなんて最低ね。しかも、SMプレイが好きだったなんて。もう離婚しましょう、私達』

「ままま、待ってくれ。説明させてくれ。今の聞こえた声は、魔王城で鎖に繋がれた若いお姫様が僕に声援をくれただけであって、断じて浮気をしていたり、変な店に通っているわけじゃ——」

『どうせあなたの方から色目でも使ったんでしょ。それに若いお姫様って、やっぱり年を取った私よりも若い子の方が好きなんだ』

「そんなことないよ。いつだって僕は君一筋だよ」

どうしてくれるんだ、と勇者は妻との会話をこじれさせた原因となったお姫様を、虫を見るような冷たい目で睨み付けた。

『大体、あなたは魔王の城で魔王と戦っている最中だと言うけど、それならどうして電話に出られるわけよ？』

「それは魔王様の聞きわけが良くて、ちょっとの間、戦うのを待ってもらっているんだ」

『あなたは馬鹿なの。もっとマシな言い訳を考えなさいよ。ゲームみたいにポーズ画面で戦闘が中断できるわけあるまいし、どこの世界に戦闘中に妻と電話をしている無防備な勇者を襲わない魔王がいるのよ。どうせ、異世界に行って世界を救う度に愛人をこさえて、ついでに子供も作って家に帰ってくるんでしょ。この節操なしの下半身野郎！』

外野からの声に煽られて、妻の被害妄想がどんどん酷くなっていく。

「そんなわけないだろ。僕の話を少しは聞いてくれよ」

『はいはい。で、今あなたがいるのは愛人一号、二号、それとも愛人三十八号？ 相手は人間のお姫様、町娘、まさか女の魔王とか？』

僕の言葉を信じてくれよ、と勇者は泣きそうな顔になりながらも必死に自分の身の潔白を訴える。

三度、勇者に向かって愛の告白を叫ぼうとした王族の女がいたことに気が付いた魔王は、「その雌猿は黙っている。勇者の話が聞こえん」と、怒りのあまり声を奪う魔法を使って彼女を黙らせた。

携帯から漏れる妻の声が聞こえていた魔王は、酷く狼狽している勇者の事情を察してか、この時ばかりは妻や娘を持つ同じ一人の男として「頑張れ」と無言で親指を立てて勇者のことを応援していた。

仕事人間だった魔王は人間界への侵略に固執するあまり、妻や娘の存在をないがしろにしがちだった。最近では家族仲が冷え切って彼らとの関係がギクシャクしだしたのが魔王の悩みである。

そんな悩みを抱えている魔王は、無意識のうちに女関係で苦労している勇者に今の自分を重ねていたのかもしれない。

『もういいわ。分かったわ。あなたが魔王城で魔王との最終決戦をしているというのなら、さっさと魔王を倒してきなさい。今、お風呂に入った娘がドライヤーで髪の毛を乾かしているから、私達が布団に入って寝てしまう前に家に帰ってきてちょうだい。制限時間は十分よ。そしたらあなたの言い分を聞いてあげるわ』

「本当に！？」

『でも、約束が守れなかった時は離婚よ。娘を連れて実家に帰らせてもらいます。世界を救うなら家族に迷惑をかけないようにやってちょうだい。もしも私が寝てしまう前に帰宅できたのなら、その時は娘の将来のために、来月のあなたのお小遣いをどこまで削るかという議論から話を始めましょうね』

そう言い終えると、妻は一方的に電話を切った。

勇者は悲壮感に満ちた表情のままうなだれ、無言で携帯をポケットの中に戻す。

たとえ魔王との戦いに勝利して世界を救ったとしても、家に帰れば世界を救うこと以上に大変な修羅場が待ち構えていることが確定した勇者の背中には、絶望感と哀愁が漂っていてとても小さく見えた。

ゲッホゲッホ、と勇者は猫背になった背筋を伸ばして咳払いをし、気持ちをすぐに切り替える。

「大変お待たせしました。では、話の続きをいたしましょうか。そちらは人質を解放したくないと。そして、人間との戦争も続行する。そういった条件でよろしいですね？」

「その通りだ。いくら我が軍に大規模な損害が出たとは言え、こちらに人質がある限り、魔族が人間に負けはしない。しかし、覇権の勇者——彼女との話はもう良いのか？」

「ああ、携帯のスピーカーから声が漏れていましたか……先程は見苦しいところをお見せしてしまって申し訳ありませんでした。それと、戦う前に時間をくださったことには心から感謝しています」

「礼には及ばんよ。今の会話の相手は勇者の彼女か？」

「いいえ、私の妻でございます。もう結婚しておりまして、今年で五歳になる娘がおります。まあ、私も勇者という職業が忙しい身——」

「そうか。私にも妻と反抗期の娘がおるが、多忙な仕事に、男勝りな妻を持つと、お互い家族の機嫌を取ることに苦労が絶えないな」

本当にそうですね、と勇者は溜息を吐いて深々と頷く。

今この瞬間、二人の間に種族や立場の関係を越えた奇妙な友情が芽生えかけているのを感じていた。

「妻と娘を大切にしておくがよい。あと、ベタな手ではあるが、夫婦仲を修復したい時は『愛している』と言っておけ。更に、妻にプレゼントなんかすると効果的だぞ。これは世界で一番恋に良く効く魔法の呪文だ」

「とても参考になるアドバイスありがとうございます。私も早速家に帰って試してみます。しかし、あなたとは一度、どこかで同じ酒を飲んでみたいものですね」

「奇遇だな。私もそう思っていたところだ。どうだ、人間側の味方なぞ辞めて、私の元で仕えんか。この我がものとなれ、勇者よ。勤務時間は融通を利かせてやるぞ」

「有り難い申し出ですが、私は現在勤務中として、仕事をサボって酒を飲むことも依頼人を裏切ることでもできません。仕事をするにあたって、公私混合は良くありません。ここは世界を救う話をいたしましょう」

「確かに公私混合は良くないな。しかし、人質は解放できない。人間界への侵攻も止めるつもりはない」

では、と勇者は銀縁眼鏡の鼻あての部分を中指で押し上げる。

その次の瞬間、謁見の間にいた人質が全員、この場から姿を消した。

「な、人質はどこに消えた！？」

「そちらが人質を解放したくないといただけないので、転送魔法を使って全員を湖の国の城へ飛ばしました。依頼内容では奪還するのは湖の国の姫様だけで良いとありましたが、まあ、ここはサービスとして人質全員を解放しておきました」

バカな、と魔王は額から冷や汗を流して、にこやかな笑みを浮かべている勇者の方を見た。

「お前は私と交渉をするつもりではなかったのか！？」

「それは勿論、話し合いの席で問題が解決することが一番平和的であると思っています。しかし、話し合いに応じてもらえないのであれば、こちらも実力行使にでるしかないでしょう。それに今の私は時間がありません。世界を救うこと以上に、自分の家庭を崩壊の危機から救わねばならないのです」

勇者は機械的な営業スマイルを崩さずにいたが、その眼鏡の奥にあるその目は微塵も笑っておらず、かつてない程に闘志がみなぎり熱く燃え上がっていた。

「分かった、覇権の勇者よ。残りの問題について迅速かつ冷静に話し合おう。だから、あと三步ほど私の方に近付いて来てくれないか」

魔王は猛獣を宥める調教師のように、慎重な物言いで勇者を手招きする。

では早く話し合しましょう、と勇者は魔王の誘いに乗って三步前に出た。
「かかったな、勇者！」
と魔王は叫び、勇者が電話をしている間に床に仕掛けたトラップを発動させる。
勇者の立っていた地面が赤く光り、床に魔法陣が浮かび上がる。そして、勇者は床に出現した魔法陣に関して反応を示す間もなく、そのまま転送魔法が発動して別の空間へと飛ばされてしまった。
魔王が使用した魔法は、魔法陣の中に立っていた相手を魔族が信仰する邪神の生贄として捧げるために使用されるものであった。
「この世界も家庭の危機も救えなくなるが悪く思うな、覇権の勇者よ。これが私の仕事なのでな。魔界に恐怖を振り撒く勇者から、家族と部下と国民の命を守らなければならない」
邪神様の手にかかれば勇者も亡き者になるはずだ、と魔王は誰もいなくなった部屋の中で、王座に鎮座したまま自分の作戦が成功したことを喜んで邪な笑みを浮かべた。

7

魔王の魔法によって何もない真っ白な世界へと飛ばされた勇者は、上下左右という概念が存在しない次元の狭間に浮かんでいた。
「ここはどこでしょうか？」
勇者は周囲を見渡してみるが、見渡す限りの白い空間が広がっているだけだ。自分のいる場所がどこなのかという手掛かりは一切見つかりそうにない。
勇者は腕時計に目をやる。時計は正確に動いていた。
だが、現在の時刻はもうすぐ最初に予定していた勤務終了時間に迫っており、これでは定時に上がれなくなってしまう。
家庭崩壊の危機だ、と勇者は腕時計を見て溜息を漏らす。
勇者は慌てて元の世界に戻る方法を探ろうとしたところ、彼の下から巨大な存在が迫ってきた。
その存在は頭部がヤギに似ており、その体表は赤い毛にびっしりと覆われている。その両目は世界の深淵を写し込んだかの如く黒く、頭の横には橙色の二本の角が生えている。
あまりにも体が大き過ぎるため、勇者からは怪物の頭部しか見えず、怪物の全体像は分からない。
「お前は誰だ？」
ヤギ頭の怪物が空間を揺らすような冒瀆的な声を出してゆっくりと喋る。
「どうも初めまして。異世界から召喚されました、派遣勇者をしております。田中霸王と申します。以後お見知りおきを。もしよろしければ、ここがどこで、あなたが誰か説明していただけないでしょうか？」
「私の名前は邪神ヨルトース。魔族共が神と崇める存在だ。そして、ここは人間達が崇める神、ヒルナンデスによって私が封じ込められている空間だ」
「神様が出てきたか」
と勇者は露骨に嫌そうに舌打ちをする。
「私はかつてヒルナンデスと共に世界を創ったのだが、人間と魔族、どちらの種族を世界で繁栄させるかで揉め事となり、ヒルナンデスに閉じ込められてしまった。私もヒルナンデスを別の空間に閉じ込めてやったのだが。ここから脱出するにしても、ヒルナンデスとの戦いで力を消耗してしまったせいで、今の私には魔族達のいる世界の扉を開く力がない。だから、こうして魔族共が送ってくる生贄を食べて力を蓄えているのだ」
「聞いてもいないのに自分語りを始めてしまうとは。よっぽど暇なんですね」
勇者は欠伸をしながらヨルトースの昔話を聞く。
「そのお前からは強大な魔力を感じるぞ。お前を食べれば私は力を取り戻して元の世界に戻ることができる。ヒルナンデスと人間を滅ぼして魔族の住みやすい世界を創らね

ばならんのだ。我が、生贄となれ、派遣の勇者よ」

このヨルトースとヒルナンデスの対立こそが、魔族と人間との間で百年の時をかけて続いてきた戦争の根本的な原因である。だが、今さっきここに来たばかりの勇者はそんなことを知るはずがない。

勇者の真下からヨルトースの頭部がゆっくりと近付いていく。

「いきなり食人嗜好をカミングアウトとか、そんなことでは恐がられて誰からも好かれませんよ。しかもパツと見、悪の権化みたいな姿をしてらっしゃる」

そう言って、勇者は体の位置を入れ替えてヨルトースと向かい合った。

「この身に危機が迫っているのでは戦うしかありませんが、その言い方ですと、ここからの脱出法を知っているようですので、ここは半殺し程度で済ませておきましょうか」

「ちっぽけな人間如きが神に勝てると思っているのか。勇者だからと言って思い上がるな。身の程をわきまえよ」

「なんか、いきなり最終決戦みたいな展開になっておりますが。私はこう見えても、この手の邪神は散々退治してきました、邪神ハンター一級の免許も持っております。今更、神様一柱程度では全く動じませんよ」

「豆粒のサイズの勇者でも、神を恐れずに虚勢を張るか。面白い。だが所詮、これからお前が何をしようとも、私の生贄となる結果は変わらん！」

ヨルトースはその大きな口を開けて勇者を丸呑みしようとした。

「プロジェクトに失敗して仲間と喧嘩別れし、こんな所にまで左遷された神様が威張らないでください。こっちには愛する妻と娘と異世界の命運がかかっているのです！」

勇者は手に持っていたビジネスバッグを開いて、中から黒のノートパソコンを取り出す。

そして、勇者はノートパソコンの角を持ち、それをヨルトースに向かって振り下ろした。

「奥義、ハケン斬り！」

と勇者は叫んで技名を口にする。

ノートパソコンから巨大な光の刃が飛び出し、ヨルトースと衝突して勇者達のいる空間が黄色い光で包まれた。

8

ハッハッハ、と勇者が謁見の間から消えたことを確認した魔王は心底嬉しそうに高笑いをする。

だがその笑いも長くは続かず、それから三秒して謁見の間が黄色い光に包まれたかと思えば、轟音が鳴り響く。そして、光が収まった時には魔法陣のあった床の上に勇者が立っていた。

有り得ない、と魔王の口が開いたまま塞がらない。

勇者の立つ後ろには角のように見える巨大な柱が、謁見の間の天井と床を横幅いっぱい貫通して深々と突き刺さっている。部屋の形は崩れて床が斜めに歪み、謁見の間は半壊していた。

勇者は完璧に邪神様のいる世界へと飛ばされ、邪神に食われてこの世から消滅したはずだ。それなのに、勇者の見た目には髪が乱れて七三分けが崩れている以外に何の変化もない。左手にビジネスバック、右手にノートパソコンを持ち、眼鏡をかけたスーツ姿のまま魔王の前に戻ってきている。

「やれやれ、流石に邪神を倒して、元の世界の脱出法を聞き出すのは骨が折れましたよ。おまけに邪神から折ったはずの角がこちらの世界に付いて来てしまい。魔王城を壊してしまって申し訳ありませんね。まあ、弁償はできませんので、修繕費はそちらでお持ちください」

勇者はノートパソコンをビジネスバックの中に仕舞って、開いた方の手で胸ポケットから折り畳み式の櫛を取り出す。そして、乱れてしまった髪型を七三分けに整え始

める。

まさか邪神を倒してこの世界に帰還したというのかと思うと、元から青かった魔王の顔が病的と思えるほど真っ青になるまで変化していく。

さてと、と髪型を直した勇者は櫛を胸ポケットの中へと戻し、魔王の元へと歩いていく。

「来るな、来るな、来るな、来るな！」

死を予感して取り乱した魔王は自分に近付いてくる勇者に向かって、魔法で火球や電撃などを飛ばす。しかし、全ての攻撃は勇者の体に当たると同時に弾けて消える。

「話し合いの続きをしましょうかね」

勇者は魔王の座る王座の前で立ち止まる。

魔王は勇者に対する恐怖のあまり椅子から崩れ落ちて全身が震えていた。

勇者は機械的で不気味な営業スマイルを浮かべて、魔王の肩に触れようと右手を伸ばす。

その時、勇者の右腕に付けていた腕時計のタイマーが鳴った。

「おや、どうやら業務終了のお時間ですか。では、家に帰らないと」

勇者は腕時計のタイマーを確認し、ボタンを押して電子音を止める。

「わ、私を倒さないのか、勇者？ 魔王と勇者が出逢えば、どちらからか死ぬまで戦い続けるのが宿命というものであろう」

「最初から世界を救うのは一時間までと決めていました。人間と魔族の戦争を止め、囚われた王族の子供達を助け出し、ついで戦争の火種となっていそうな邪神も半殺しにしてきました。なので、これでもう私は既に十分な働きをしたと判断します」

「そ、そうなのか？」

体の震えが止まった魔王は椅子に座り直し、恐る恐る勇者に尋ねる。

「今回の仕事の目的は魔王を殺すことでなく、世界を救うことですからね。魔王軍の戦力もかなり消耗し、敵の拠点である魔王城は半壊。魔王軍のトップである魔王様がこの調子ならば、今の魔王軍は人間軍にとって脅威ではありません。私は人間の世界を魔王軍の侵略の危機から救ったと言えるでしょう」

これでやっと家に帰れる、と勇者は首を絞めていたネクタイを少し解いて緩め、白シャツの第一ボタンを外す。

「私、サービスをするのは好きでも、サービス残業をするのは嫌いなんです。だから今日は早く家に帰って、妻と娘に家族サービスをしたいと思います」

最後によろしければこれをどうぞ、と勇者は流れるような自然な動作で名刺入れから名刺を取り出して魔王に渡す。

「これは何なのだ、ゆ、勇者タナカよ？」

「これは私の連絡先が書かれた名刺でございます。今回の一件で私の能力の高さは魔王様にも伝わったと思いますし、そちらの軍力も大幅に削られてしまって、この絶好のチャンスを逃さんとする人間側の勢力は反撃を開始し、これから色々とバランスの崩れてしまった情勢を立て直すのは大変でしょう」

「な、何が言いたいのだ、勇者？」

「もしもこの先、魔界が人間達からの侵略を受け、魔族が存亡の危機に立たされるような状況になった時、何か世界を救って欲しいなどのご要望があれば、こちらに書かれた呪文を唱えて連絡してください。あなた様の持つ、世界の半分を対価に仕事をお引き受けいたしますので」

勇者は機械的で不気味な営業スマイルを浮かべたまま魔王に向けて、ビジネスバックの中から栄養ドリンクを差し出す。

「これは私からのサービスです。今日は一日、色々と激務をこなしたお陰でお疲れでしょう。一度は断られましたが、悪魔にでも騙されたと思って、是非ともこれを飲んでお休みなされることをお勧めします」

「そ、そんな大切な物を勇者であるお主が、人間の敵である私に渡してもいいのか？」

真意の読めない勇者の行動に戸惑いながらも、魔王は勇者から渡された栄養ドリンクを受け取った。

「勘違いしないでください、魔王様。私が世界を救うのは、愛する者のためや大それた正義感、ましてやボランティアなどではなく、あくまで依頼を受けて報酬を受け取る正当なビジネスなのです。私に仕事の依頼をする者がいるのであれば、依頼人が魔族か人間などという細かいことには拘りませんよ。そう、報酬さえ支払ってもらえるならば、私は誰にとっても等しく勇者。そうであってこそその派遣の勇者なのです」

それでは失礼しました、と勇者は魔王に向かって軽くお辞儀をし、最後に機械的な営業スマイルではない人間味のある、それでいてどこか裏のあることを感じさせる悪魔的な笑顔を浮かべて、この世界から静かに姿を消した。

[戻る](#)